

# ペスタロッチーの『隠者の夕暮』における若干の考察

福田 博子

Some Thoughts of Education in J.H.Pestalozzi's "The Evening Hour"

FUKUDA, Hiroko

キーワード：神、人間の本性同一、親心、子心、家庭

## はじめに

本稿は拙稿『ペスタロッチーの隠者の夕暮における教育思想』<sup>1)</sup>を基に加筆増補したものである。

『隠者の夕暮』(以下『夕暮』と略す)は、1780年ペスタロッチーが35歳の時、イーゼリン主宰のエフェメリデン誌に掲載された断片的な格言集である。180余の小節からなっているが、ペスタロッチーの教育思想の出発点である。以下にこの格言集の中の主要な思想を選択して述べることにする。為政者に要請する事柄、そして家庭についての見解、自然についての概念を考察したい。それから為政者への要請に関連するが、ペスタロッチーと殆んど同時代の文豪ゲーテとの関わりについても論じたい。『夕暮』の原書の翻訳を揚げ、自分なりの解釈を試みる。また、国内外の教育学者の『夕暮』観を紹介する。

## 1 『夕暮』における教育思想

### (1) 為政者への要請

『夕暮』の冒頭で、人間とは何かと自問自答している。

「玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住まっても同じである人間、その本質から見た人間、いったい彼は何であるか。何故に賢者は人類の何者なのかを我々に語らないのか、何故に高貴な人達は人類の何者なのかを知らないのか。農夫でさえ自分の牡牛を使役するからにはそれを知っているではないか。牧者も彼の羊の性質を探究するではないか。」<sup>2)</sup>

何と格調の高い文であろうか。身分の高い者も低い者も同じ人間である。農夫や牧人が飼っている牧畜の性質を熟知し、よく世話をするように、為政者は国民のことをよく知り、国民の幸福を真に考えて政治を行っているであろうかということであり、まさに現代にも通じる格言である。これと同じようなことが以下にも書かれている。この格言も溜飲の下がるような断言である。

「どんな低い地位にあっても、婢僕はその主人と本質において同じであり、主人は婢僕の本性の要求を充足させる責任がある。」<sup>3)</sup>

「国民を教育して向上させ、彼の本質の幸福を享受させることにこそ、人民の長たる父があるのである。」<sup>4)</sup>

「すべての国民は家庭の幸福を享受することによって、君主の親心に対する子としての純粋な信頼のうちに休らぎ、その君主が子達を教育し、向上させて、人類のあらゆる幸福を享受させる父として

の義務を果たすことを期待している。<sup>5)</sup>

すべての国民が家庭の幸福を享受できるように、いい政治をすることが君主の務めである。それによって、国民は君主に対して信頼の念を持ち、君主は国民を教育し、高め、家庭の幸福を享受できるように導いてくれることを期待しているのである。

後に『人類の発展における自然の歩みについての私の探究』(Meine Nachforschungen ueber den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts, 1797)において、人間と政治と教育との関連で、人間の本性を究明している。人間の発達段階として、自然的状態、社会的状態、道徳的状态の三つの段階があり、人間は前の二つの段階を経て道徳的状态にまで向上しなければならないという。それと同時に、人間にはこの三つの状態がミックスされていると主張する。

また、『立法と嬰兒殺し』(Ueber Gesetzgebung und Kindermord, 1783)は、当時社会問題であった嬰兒殺し防止の社会施策を論じた作品であるが、少女が国家に絶望して嬰兒を殺害することを述べている。ここで国家が少女を死刑に処するのではなく、国民の道徳的感情を向上させる方策をとるべきであるといっている。即ち「悪の源泉を防止しようとする立法家は不徳の一般的な源泉、つまり傲慢、家庭的な高慢、貪欲、怠惰、贅沢、そして特に益々増えてくるエゴイズムを阻止しなければならない。」<sup>6)</sup>「立法家は犯罪者の人間の心の中に炎々と燃えている善の最後の余燼が、彼の罪の処罰方法によって、かき消されぬように配慮しなければならない。」<sup>7)</sup>

この作品は、為政者は親心を持って欲しいとの『夕暮』での政治道徳論をさらに発展させたものといえる。

## (2) 家庭について

まず、家庭、家庭教育に関する箇所を拾ってみる。

「人類の家庭的関係は最初のそして最も優れた自然の関係である。」<sup>8)</sup>

家庭の成員は祖父母、親、兄弟、姉妹といった血のつながった間柄であり、人が誕生して生長する最初の小社会であり、基本的な、安全な環境である。家庭はすべての営みがごく自然に行われる生活共同体である。

「人間は家庭の幸福の純粋な浄福を静かに享受するために、自己の職業に精励したり、市民的制度の重荷に耐えるのである。」<sup>9)</sup>

人々は家族の幸せのために、自分の職業に精励できるし、社会の制度的な煩わしさや人間関係の重荷にも耐えることができる。

「したがって職業や階級状態のための人間の陶冶は純粋な家庭の幸福を享受する窮極的目的に従属しなくてはならない。」<sup>10)</sup>

職業陶冶も階級状態のための陶冶も専門的な知識や技術を習得するものであるが、基本的には人間陶冶が大切であり、この窮極目的は家庭の幸せを享受することである。

「したがって、父の家よ、汝は人類のすべての純粋な自然陶冶の基礎である。」<sup>11)</sup>

家庭は毎日の生活の中で、生活を通して自然な形で、基本的なことがすべて陶冶される場である。

「父の家よ、汝は道徳と国家との学校である。」<sup>12)</sup>

家庭は子どもに基本的な躰をきちんとし、道徳的に優れた人間にしなければならない。また国はそのような家庭を見習って、一人一人の国民を育成しなければならない。それとともに、家庭で立派に育成された子どもは、やがて国政に参与する機会に恵まれるかもしれない。

「人間よ、汝はまず子どもであり、その後職業の徒弟である。」<sup>13)</sup>

前文と重複するが、まず子どもは家庭でしっかりと躰をされなければならない。しかし、いつまでも子どもであるのではなく、基本的な躰を身につけた上で、今度は徒弟として職業の訓練を受けなければならない。

「子どもの徳性は徒弟時代の幸福であり、また生涯のすべての幸福を享受するための汝の素質の最初の陶冶である。」<sup>14)</sup>

徒弟時代は家庭以外の場所で、将来の職業の知識や技術を学ぶ最初の社会である。ここで、家庭とは違って将来の職業の仲間と一緒に種々の訓練を受けることになるのだが、家庭できちんとした教育を受けた子どもはさほど苦勞することはないだろう。また、この時代に身につけた徳性は子どもを大きく成長させるであろう。たとえ苦勞することがあっても、それは将来の幸福を享受するための訓練でもある。

「人間は内的な安らぎを感じないように陶冶され、彼の境遇と彼が得ることができる楽しみとに満足し、すべての障碍に耐え、顧慮し、父親の愛を信ずるように陶冶されなければならない。これこそ人間の智恵への陶冶である。」<sup>15)</sup>

人は心の平穩が保たなければならない。その人の境遇において享受することのできる楽しみや喜びに満足し、家庭で愛され信頼されていることによってあらゆる障碍にも負けずに、困難に立ち向かっていかなければならない。これこそ人間の智恵への陶冶である。

次の引用は重複するところがあるが、ペスタロッチーの家庭論をより理解するために掲げることにする。

「満足している乳呑子はこの道において母親が彼にとって何であるかを知っている。しかも母親は幼児が義務とか感謝とかいう音声も出せないうちに、感謝の本質たる愛を乳呑子の心に形作る。そして父親の与えるパンを食べ、父親と共に囲炉裏で身を暖める息子は、この自然の道において子どもとしての義務のうちに彼の生涯の幸福を見つける。」<sup>16)</sup>

「私の子どもが私の手から食べるパンが、子どもの感情を陶冶するのであって、子どもの将来のことで私が夜も寝ないで心配することへの子どもの驚きが陶冶するのではない。」<sup>17)</sup>

親が子どもの面倒を一生懸命に見れば、子どもはまだ言葉が話せなくても、親から愛されていることを感じ、親への愛情や感謝や信頼感を持つ。それは親からきょうだい、近隣の人への愛情、信頼、国家への愛着、最終的には神への信仰に発展するのである。このことが大切であり、親が子どものことを心配したり、悩んだりすることは、かえって子どもに不安や負担を感じさせるのである。

この教育論は特に後の『ゲルトルート子ども教育法』(Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, 1801)、『幼児教育の書簡』(Letters on early Education, addressed to J. P. Greaves, 1818~19)等に展開されている。

「子心と従順とは、完成された教育の結果でもなければ、その後に来る結論でもなくて、人間陶冶の早期のそして最初の基礎でなければならない。」<sup>18)</sup>

子どもは小さいうちは無知であるし、何もできないので親の助力を必要とする。助力が必要な時はいつでも助けてやらなくてはならない。子どもは親に従うであろう。しかし、子どもへの愛情が前提である。親は自信を持って子どもを教育すべきである。

「公けの罪に対する嫌悪は、自己の父と母とを嘲弄する者に対する子どもとしての感情である。」<sup>19)</sup>

親から常に色々なことを教えられている子どもは善悪の判断ができるようになり、公けの罪に対して嫌悪感を抱くようになる。したがって、子どもにとって親のことを悪く言われるのは、不愉快極まりないが、この感情は公けの罪に対する嫌悪感と同じである。親を愛し信頼しているからこそ、公けの罪に関する嫌悪感が生まれるのである。

以上、『夕暮』における家庭についての若干の考察を試みたが、ここで教育学者の見解を紹介する。

ホイバオム (A. Heubaum) は「家庭に関していうと、前の時代や同時代の人の誰もペスタロッチーに匹敵する人はいない。家族や家庭の教育に対する意義をペスタロッチーのように雄弁に賞讃した人はいなかったし、家庭の本質的な原理をペスタロッチーほど明確に見た人はいなかった。」<sup>20)</sup>と主張し

ている。

シュプランガー (E. Spranger) も同様なことを述べている。

「ペスタロッチーにとっては、人間に対する国家のスパルタ的な要求は認められず、人間と国家との間には家庭という真に人間的な有機的な形態が介入しているのである。十九世紀における家庭の哲学の発展の叙述は未だ完全になされたことがないのであるが、ペスタロッチーはこの家庭の哲学の定礎者であった。人間が幼い時からそのしっかりとした家庭的な祝福を享受しながら生活しているところにのみ、真の国民国家は存在するのである。したがって家庭教育の深化と向上なくしてはどんな国民教育もありえない。」<sup>21)</sup>

この時代、家庭や家庭教育についての叙述がなかったからこそ、ペスタロッチーの主張は注目を浴びたのであろう。『七十三歳生誕日講演』(Rede von Pestalozzi an seinem zwei und siebenzigsten Geburtstag, den 12. Jaenner, 1818) においても「父や母たちが自己自身に対する信頼を大いに失っているということが、我が現代の教育手段が基礎を欠くに至った一般的原因である。」<sup>22)</sup>とか「民衆教育を国の問題として、一般に振興するためには、何よりもまず子どもの教育のために、両親が何かを、多くのことを、すべてのことをなし得るものであるという両親の自覚を、彼等の心のうちに再び呼び醒ますことがどうしても必要である。」<sup>23)</sup>と訴えたのである。

この訴えは、21世紀の現在にも十分通用するのである。

### (3) 自然について

『夕暮』の中で自然という言葉はしばしば登場する。ペスタロッチーにとって、自然とは何であるか？以下に使われている自然という言葉を読み、自分なりの解釈を試みる。

先にも述べたが、「満足している乳呑児、(中略)父親の与えるパンを食べ、父親と共に囲炉裏で身体を暖める息子は、この自然の道で子どもとしての義務のうちに彼の存在の幸福を見つける。」<sup>24)</sup>

この自然の道は親子の愛情を意味しているのだと解釈する。親が子どもの面倒を見、子どもが親の愛情を感じるのには、本能的なもの、人間の本性のポジティブな面である。

また、「高貴なる自然の道よ、汝が導く真理は、力であり、行為であり、陶冶の源泉であり、人類の全本質の充実であり、情調である。」<sup>25)</sup>や「自然の力はたとえそれが抵抗できない強い力で真理へ導くとはいえ、その導きのうちには少しも硬直したところがない。(後略)」<sup>26)</sup>では、真理への道と考えるはどうであろうか。

さらに、「人間の精神が一つの事柄に対して一面的に、強制的に導かれると、人間は自己の力の均衡や知恵の力を失ってしまう。だから自然の教育法は強制的ではない。」<sup>27)</sup>「しかしそれにも拘らず、自然の陶冶のうちには確かさがあり、自然の秩序のうちにはつましい正確さがある。」<sup>28)</sup>と述べているが、これは教育の方法に関わるものである。家庭でも学校でもそうであるが、全体を見ないで、一部分だけを見て、圧力をかけたり、強制することはよくないことを述べている。また、自然の陶冶は人の手が加わることなく自然のまま発展していくのであるが、自然には秩序があるので、自然の力と秩序に従うべきであるということであろう。

「とりとめのない、渾沌とした博識もまた同様に自然の道ではない。」<sup>29)</sup>

無理やりに言葉の規則を教えた当時の学校の人為的な方法をペスタロッチーは批判した。上述したように、自然には秩序があるので、散乱した、混乱した多識もまた自然の教育法ではないのである。

また、自然の陶冶といっても何もしてはいけないというのではなく、練習をすることは技術を習得するさいの必須要件である。「自然は人類のすべての力を練習によって発展させる。そしてそれらの力の生長は使用することに基づいている。」<sup>30)</sup>

「人類の陶冶における自然の秩序は、人間の認識や天分や素質を応用したり実行したりする力である。」<sup>31)</sup>

自然の秩序を説明しているのだが、この自然は人間自然、つまり内的自然、人間の内部の自然であろうか。

「低級な虚飾への傾向、あるいは素質や力を誇示して自己の弱点を覆い隠そうとする衝動は、最も低級な最も弱い人間にも存在する方向であるが、この方向は陶冶する自然のこの道から外れている。」<sup>32)</sup>

人間の本性として誰にでも虚飾への傾向や素質や力を誇示して弱点を隠そうとする衝動はあるのだが、これは自然の道ではないというのである。この傾向や衝動は人間自然のネガティブな面であろう。

以上、自然について書かれている箇所を拾ってみたが、意味はいつも同一ではないし、曖昧なところもある。また自然という言葉を使っていなくても、自然と解釈できる節もある。自然という言葉が使われていても、意味のない自然もある。以下に三人の学者の見解を紹介する。

ホイバオムによると、「ペスタロッチーの場合、自然の概念は益々豊かな—しかし勿論益々一定していない—内容である。(中略)自然はまさに現実全体を意味している。その中に彼は個体や道徳的施設、環境や事情を暗示している。自然の教育は彼にとって、子どもと組織、出来事、事実との相互作用である。」<sup>33)</sup>と主張している。

デレカート (F. Delekat) によると、「繰り返し使われている自然の中心概念の理解がここで問題である。ヘルダーのように、ペスタロッチーも幾度か自然に du で語りかけている。幾つかの節では、殆んど個人的意志のように思われる。後に、神という概念は自然の概念と入れ替っている。(中略)彼の場合、自然はカントの**純粹理性**、フィヒテの**絶対自我**、ヘーゲルの**絶対精神**、ライプニッツの**神**に値する。**理性**、**自然**、**自我**、**精神**は半ば形而上学的用語であり、半ば心理学的用語である。ペスタロッチーの場合、中心概念の境界がないこと (Randlosigkeit) が特別に注意を引く。(後略)」<sup>34)</sup>と説明している。

ジルバー (K. Silber) によると「ペスタロッチーの自然概念は一義的ではない。それは十八世紀に自然という語につけ加えられた一切の意味を担っている。自然概念は外界と同時に人間の本性をも意味する。それは人間のより高い (神聖な) 本性でもあれば、より低い (動物的な) 本性でもある。自然は外的でもあれば、内的でもあり、善でもあれば悪でもある。」<sup>35)</sup>と主張している。

#### (4) ペスタロッチーとゲーテ

前述したようにペスタロッチーとゲーテとはほぼ同時代の人である。生存年については、ペスタロッチーは (1746~1827) であり、ゲーテは (1749~1832) である。

『夕暮』で、ペスタロッチーはゲーテを次のように非難している。

「お、高位にある君主よ！お、力強きゲーテよ！その親心が汝の義務ではないか？お、ゲーテよ、汝の道はすべてが自然でないではないか！弱きを労わること、自己の力を用いることにおける父の心、父の目的、父の犠牲、それが人類の純粹な気高さである。お、高位にあるゲーテよ、私は汝を私の低い地位から仰ぎ見て、戦慄し、沈黙し、そして嘆息する。汝の力は国の栄光のために幾百万の国民の幸福を犠牲にする大君主たちの圧迫力と同じである。」<sup>36)</sup>

では、この頃のゲーテはというと、1774年9月『若きヴェルターの悩み』が刊行され、世界的な反響を呼び、1775年11月、アウグスト公の招きを受け、ヴァイマルに着き、その後当地に永住した。76年6月にヴァイマルの国政に参画、閣議に列した。82年6月3日ドイツ皇帝より貴族に列せられ、7日、内閣首席になった。

ペスタロッチーの書簡集には以下のことが書かれている。

「1775年と1779年とゲーテはラファーターの友人としてチューリヒに滞在した。その際彼の崇拜者

の一人だったホツェ博士 (J. Hotze, 1734~1801)<sup>37)</sup> もリヒタースヴィルに訪ねた。ペスタロッチャーがゲーテを個人的に知っていたかどうか我々は知ることが出来ない。(中略)三十年テオドル・シャハトが多分イフェルテンへの旅行の途上で、ゲーテをワイマールに訪ねた時、詩人は彼にペスタロッチャーへの挨拶を託した。そのなかで彼はペスタロッチャーを重要で、そして善良な愛すべき男と呼んだと言われる。—1812年に誰がペスタロッチャーの挨拶をゲーテに届けたか、今までのところ確認されていない。それはペスタロッチャーの妹だったかもしれない。彼女はこの年の夏親族の者と一緒にイフェルテンに兄ペスタロッチャーを訪れている。<sup>38)</sup>

「自然は永遠の未来に、文明の世紀において不自然がはびこることを見抜いたのです。それで自然はそのような時代にもなお自然自身の命を保つことができるようにと、八月二十八日をゲーテ氏の誕生日に選んだのです。」これは1812年8月28日、ペスタロッチャーによって、イフェルテンで書かれたものである。<sup>39)</sup>

後に、ペスタロッチャーはゲーテの詩をやや不正確ではあるが、自分の作品に引用している。『リーンハルトとゲルトルート』(Lienhard und Gertrud, Erster Theil, 1781)の中では『旅人の夜の歌』(Wanderers Nachtlied)を、『探究』(Meine Nachforschungen ueber den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts)には『神性』(Das Goettliche)を載せている。

『リーンハルトとゲルトルート』は長編小説で、最初の部分のあらすじはこうである。石工のリーンハルトが悪漢の税吏、フンメルにそそのかされ、飲酒の上、賭博をして給金を使い果たしてしまう。悩みに悩んだ妻ゲルトルートは領主アルナーに相談し、彼の力を借りてようやく家庭がもとのように幸せになる。『旅人の夜の歌』は、12章の家庭のよろこび<sup>40)</sup>の中に登場するが、ある日、リーンハルトが帰宅するまでに、この歌をゲルトルートは子ども達に教え、父親が帰宅すると、子ども達は母親と共に歌う。リーンハルトは眼に涙を浮かべ、家庭の平和をかみしめる。

『探究』では社会的状態のところ、国法について記述しているが、以下の通りである。

「私はここで社会的状態における公の制度によって生のすべての喜びが破壊されるだろうという予感がした。そして私は国法とは何かと問わずにおれなくなった。だがこの時何気なく私の心に浮かんだのは次のゲーテの詩であった。」<sup>41)</sup>とあって、『神性』を引用している。

『夕暮』で、あれだけひどい非難を浴びせたにも拘わらず、自分の作品にゲーテの詩を引用したのは、詩人、小説家としてのゲーテへの憧憬の念があったからではないであろうか。

ペスタロッチャーとゲーテの共通の友人もいる。ヘルダー (J. G. von Herder, 1744~1803)、クロップシュトック (F. G. Klopstock, 1724~1803)、ヴィーラント (C. M. Wieland, 1733~1813)、フィヒテ (J. G. Fichte, 1762~1814) 等。また、後になってからであるが、ゲーテがペスタロッチャーの弟子の学園を訪問したこと等で、二人はつながっていると考えるのである。

1804年ペスタロッチャーはブルグドルフ城からミュンヘンブーフゼーの僧庵に移転したのであるが、ホーフヴィルにあるフェレンベルク (P. E. von Fellenberg, 1771~1848)<sup>42)</sup>の学舎に近かったので、一時合併し、共同経営することになった。ペスタロッチャーは校長として教育に専念し、フェレンベルクは財政や管理を担当した。しかし、二人の教育観や性格の相違から学校は分離したのである。

ゲーテの後の作品『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(Wilhelm Meisters Wanderjahre)の中の教育州は、このフェレンベルクの学校がモデルと言われている。

また、ゲーテの監督の下に、ワイマールのアウグスト公の二人の息子がこの学園で学んでいたという。フェレンベルクはゲーテに手紙を送り、教育の方法を批評して欲しいと懇願したのであるが、ゲーテはこの申し出をことわり、教育の目的や方法に満足であると答えたという。

さらに、ペスタロッチャーの教え子であったド・ラスペー (J. de Laspee, 1783~1825)<sup>43)</sup>の学校(ヴィースバーデンの学校)を、ゲーテが参観した時の感想は、貧民救済のための教育という目的には賛同しながらも、方法を批判したということである。つまり、簡単な数・形・語でもって教える方法は、言

語、芸術と言った伝統を前提とする精神的文化を無視しているきらいがあるというのである。また、他人に尊敬を払わない生徒に対しても批判し、教育州で畏敬の念を強調したのはペスタロッチー主義教育への批判を含んでいるという。

## 2 教育学者の『夕暮』観

ここで、8名の教育学者の『夕暮』観を紹介したい。

### (1) シュプランガー

「『夕暮』の思想の中に全体的なペスタロッチーが現れている。自分の小屋の気易さから出発して、彼は遠くまで哲学したのである。彼が齢を重ねてやっと到達することになる諸段階、それがここで早くも予感されていた。」<sup>44)</sup>

### (2) ジルバー

「『夕暮』はあるべき人間の目標を指示している。だからその調子は本質的に楽天的である。この短編を支えている形式と言葉は、その内容にまったくふさわしいものである。即ち均衡のとれた構成でも、完結した体系でもなく、宣言であり、問いかけであり、箴言である。疾風怒濤時代の熱狂的な高揚は『夕暮』をも揺り動かしている。」<sup>45)</sup>

「若いペスタロッチーの世界観は、まだひどく情緒的ではあるが、年老いたペスタロッチーが彼の思索によって証明し、実践によって確証しながら、やがて『白鳥の歌』で表現する世界観と同じものである。『夕暮』は人間の使命についてのペスタロッチーの最初の、しかし基礎的な概観である。」<sup>46)</sup>

### (3) モルフ (H. Morf)

「それは言わば彼の教育学的な信仰告白であり、崇高な理念と思想を包含している。その理念と思想が、彼の心を満たし、それを自分のものとすることによって、彼は世界において私達があれほど高く尊敬する人物になったのである。この作品は完全な精神的全体をなしている。抜粋などできないが、この教育者の発達史を知る上で最も有意義である。しかし、ペスタロッチーの著作集には欠けているので、附録として完全に伝えるなら、読者に利するところが多いと信ずる。(後略)」<sup>47)</sup>

### (4) 岩崎喜一

「(前略) いっさいの人間がそのあらゆる差別相にかかわらず、その本質において同一でありかつあるべきことを道破し—この点に実はキリスト教主義と真の人間性の一致を信条とする彼の独自の立場と同時にその現代的意義がある (中略) 『夕暮』は一つの宗教的自覚の書であるとみられるが、このような信仰の立場—父なる神への信仰—を直接既成の政治体制に結びつけて、その内面的浄化をはかろうとする意図と期待とが、そこに強くうごいている。」<sup>48)</sup>

### (5) ルップレヒト

ルップレヒトは『夕暮』を格言集と見ることには反対で、「夕暮草稿についてみると、特殊な交錯、矛盾、重複がしばしば見られるが、しかし、まさにそのような混乱が・・・われわれにとっては重要である。というのは、彼の思想が書いている過程においてはじめて展開されたものではなくて、かえってそれらすべてのものが、長い孤独な思索の結果として、一つのまとまった生活像にしっかりと形づくられたものである、ということ物語っているからである。」<sup>49)</sup>と見解を著わしている。

### (6) ホイバオム

「『夕暮』は理論的な書ではない。それはペスタロッチーの中にまどろんでいる詩的な力の最初の証明である。情熱的な叙情詩の吐露である。文体はあるいは賛美歌の歌詞や聖書の予言者の言葉を、あるいはヘルダー的な頌詩やゲーテの青年時代の詩の生気を想起せしめる。」<sup>50)</sup>

### (7) ラウマー (K. G. von Raumer)

「ノイホーフにおける貧民学校の解散はペスタロッチーにとっても世界にとっても幸福な出来事であった。というのは彼の不如意の事業になおペスタロッチーの力を浪費する必要がなくなっただけではなく、ノイホーフにおける多難な彼の内外の活動が祝福多き幾多の結果をもたらした。含蓄深いこの一連の格言集の中に、人々はペスタロッチーという天才的な一人の建築家の価値ある設計図を見つかるが、それは彼の教育体系の最も要を得た設計図である。(中略)それは彼の教育事業のプログラムでもあればまたその鍵でもある。」<sup>[51]</sup>

「深き心の思想、それは聖なる慈愛が重き苦しみの下に生み出したもの、それこそは永遠の生命の思想であって慈愛そのもののごとく永劫につきせず。」<sup>[52]</sup>

#### (8) 村井 実

「この著作は、現実的な企ての挫折によって今や隠者と自認する心境に至ったペスタロッチーが、その衷心の思いを、いわばほとぼしるがままに吐露した、人々への呼びかけ、問いかけであり、信仰告白であり、箴言である。」<sup>[53]</sup>

以上、8人の教育学者の『夕暮』観を見たが、大体共通している。農場経営にも貧民学校にも失敗し、不幸の奈落に落ちたペスタロッチーは神の声を聞いたのであろう。『夕暮』は信仰告白であり、叫びであり、詩である。後に小説やドラマも執筆したようにペスタロッチーには作家としての才能があったのである。『夕暮』には、矛盾した所、重複した所、意味の鮮明でない所もあるが、全体として温かみがある。

#### おわりに

『夕暮』の副題として書かれている「神の親心、人の子心。君の親心、民の子心。すべての幸福の源泉。」<sup>[54]</sup>こそ本書の主題であろう。家庭にあっても、親の子どもを愛する親心、子どもの親を信頼する子心が肝要である。

ペスタロッチーにとって、神への信仰は君主と国民を結ぶ紐帯であり、神によって君主と国民との内面的浄化を図ろうとしたのであった。彼の敬神感情を理解することができる。

また、『夕暮』で私は、生活の知恵というものを学んだのである。例えば、「たるを知ること」「内的な安らぎ」「人間よ、汝自身を信ぜよ」「単純と無邪気、感謝と愛に対する純粋な人間的な感情が信仰の源泉である。」等である。

ペスタロッチーにとって、君主（主人）も人民（婢僕）もその本性は同じであり、人民の本性の要求を満たしてやるのが君主の義務である。本性の要求を充足させるということは、すべての人民に家庭の幸福を享受させることである。

シュプランガーがいうように、ペスタロッチーは家庭の哲学の定礎者であり、家庭教育の深化と向上なくしてはどんな国民教育も存在しないのである。単純な表現であるが、結局、教育の淵源は家庭にあり、すべての家庭が健全であれば、国全体の風紀もよくなるのである。

たしかに『夕暮』はペスタロッチーの全思想がここから展開していく萌芽なのである。

【註】

- 1) 福田博子著『ペスタロッチーの隠者の夕暮における教育思想』「秋草学園短期大学紀要」第18号 2001年
- 2) J. H. Pestalozzi: Die Abendstunde eines Einsiedlers, Pestalozzi Saemtliche Werke herausgegeben von A. Buchenau, E. Spranger, H. Stettbacher, 1.Band Berlin und Leipzig 1927 S.265
- 3) ibid. S.276
- 4) ibid.
- 5) ibid.
- 6) J. H. Pestalozzi: Ueber Gesetzgebung und Kindermord, PSW 9. Band 1930 S.111
- 7) ibid. S.104
- 8) J. H. Pestalozzi: Die Abendstunde eines Einsiedlers, S.271
- 9) ibid.
- 10) ibid.
- 11) ibid.
- 12) ibid.
- 13) ibid.
- 14) ibid. S.272
- 15) ibid.
- 16) ibid. S.266
- 17) ibid. S.274
- 18) ibid. S.273
- 19) ibid. S.278
- 20) A. Heubaum: J. Heinr. Pestalozzi, Berlin 1920 S.71
- 21) E. Spranger: Vom paedagogischen Genius, Heidelberg 1965 S.109f.
- 22) J. H. Pestalozzi: Rede von Pestalozzi an sein Haus an seinem zwei und siebenzigsten Geburtstage, den 12. Jaenner 1818 PSW Kritische Ausgabe 25. Band Zuerich 1974 S.295
- 23) ibid.
- 24) J. H. Pestalozzi: Die Abenndstunde, S.266
- 25) ibid.
- 26) ibid. S.267
- 27) ibid. S.268
- 28) ibid.
- 29) ibid.
- 30) ibid. S.269
- 31) ibid.
- 32) ibid. S.280
- 33) A. Heubaum: J. H. Pestalozzi, S.72
- 34) F. Delekat: J. H. Pestalozzi, Heidelberg 1968 S.124f.
- 35) K. Silber: Pestalozzi, Heiderberg 1957 S.41
- 36) J. H. Pestalozzi: Die Abendstunde, S. 280
- 37) ホツェはペスタロッチーの母方の従兄で、著名なりヒタースヴィールの医師。ゲーテ等の著名人との親交もあった。ペスタロッチーにとって信頼できる友人であり、助言者であった。ペスタロッチーとフィヒテとの出会いは1793年彼の家で実現。日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学 増補改訂版 2006年 378ページ
- 38) ペスタロッチー著 長田 新訳『書簡集』「ペスタロッチー全集」第7巻 平凡社 1960年 556ページ
- 39) 上掲書 同ページ
- 40) J. H. Pestalozzi: Lienhard und Gertrud, PSW 5. Band 1930 S.50
- 41) J. H. Pestalozzi: Meine Nachforschungen ueber den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts, PSW 12. Band Berlin 1938 S.31f.
- 42) フェレンベルクは、ノイホーフ時代のペスタロッチーの親しい隣人であり、地方長官であったフェレンベルク (D. von Fellenberg) の子息であり、幼時からペスタロッチーが愛し、将来を囑望してきた青年であった。村井 実著『ペスタロッチーとその時代』玉川大学 1986年 232ページ
- 43) 福田博子著『人間ペスタロッチーについての考察Ⅱ—イヴェルドン学園の解散—』「八洲学園大学紀要」第7号 2011年 48ページ
- 44) E. Spranger: Vom paedagogischen Genius, S.101

- 45) K. Silber: Pestalozzi, S.40
- 46) ibid. S.44f.
- 47) H. Morf: Zur Biographie Pestalozzi's, Winterthur, Buchdruckerei von Bleuler-Hausheer & Co. 1868 Erster Theil S.140f. (玉川大学復刻版)
- 48) 岩崎喜一著『ペスタロッチの人間の哲学』牧書店 1959年 54f.
- 49) 上掲書 62f. ルップレヒトの原書 (Pestalozzi's Abendstunde eines Einsiedlers, 1934) を入手できなかったため、岩崎の書を参照した。
- 50) A. Heubaum: J. H. Pestalozzi, S.69
- 51) ペスタロッチ著 長田 新訳『隠者の夕暮・シュタンツだより』岩波書店 1998年 第52刷 136f.
- 52) 玖村敏雄著『ペスタロッチの生涯』玉川大学 1980年 第18刷 71ページ
- 53) 村井 実著『ペスタロッチとその時代』玉川大学 1986年 81ページ
- 54) J. H. Pestalozzi: Die Abendstunde, S.265

【参考文献】

- 1 ペスタロッチ著 虎竹正之訳『人類の発展における自然の歩みについての私の探究』「ペスタロッチ全集」第6巻 平凡社 1959年
- 2 ペスタロッチ著 杉谷雅文訳『立法と嬰兒殺し』「ペスタロッチ全集」第5巻 平凡社 1959年
- 3 シュブランガー著 村井 実 長井和雄共訳『文化と教育』—教育論文集— 玉川大学 1964年
- 4 ペスタロッチ著 佐藤正夫訳『七十三歳生誕日講演』「ペスタロッチ全集」第13巻 平凡社 1960年
- 5 H. モルフ著 長田 新訳『ペスタロッチ傳』第一巻 岩波書店 1939年
- 6 ケーテ・ジルバー著 前原 寿訳『ペスタロッチ』岩波書店 1981年
- 7 星野慎一著『ゲーテ』清水書院 1999年 第8刷
- 8 ペスタロッチ著 田尾一 一訳『酔人の妻 リーンハルトとゲルトルート』「ペスタロッチ全集」世界教育寶典全集 第四巻 玉川大学 1950年
- 9 J. W. Goethe: Gedichte, Auswahl Reclam-Verlag Stuttgart 1958
- 10 J. Rattner: Grosse Padagogen, Muenchen 1956
- 11 福田博子著『ゲーテの人間形成について』「日本女子経済短期大学研究論集」15号 1967年
- 12 福田博子著『劇作家ペスタロッチ』「日本女子経済短期大学研究論集」39号 1980年

(受理日: 2012年2月27日)